

観測部月報

★

東亜天文協會

★ 流星課報告 (111)

課長 小槇孝二郎

三月も二月と同様流星は少い。主な流星群は次のものであるが、出現は著しくはない。

出現期	輻射點		附近の星	性質
1日—4日	$\alpha=166^\circ$	$\delta=+5^\circ$	獅子 λ	緩
15日頃	250	+54	龍 ι	速
18日頃	316	+78	セフェ β	緩
下旬	161	+57	大熊 β	速
	x	x	x	x

前回報告後到着せる報告は次の通りである。

金田伊三吉(昭和15年十、十一月分)、富田弘一郎(八月份)、川人武正(十二月分)、吉井耕一(六月、八月份)、石橋正(十、十一月分)の諸氏のものであるが、其他山崎幸夫(十月25日)、三宅和夫(十二月2日)、竹谷實(十二月2日)の諸氏から火球の報告があつた。

十二月25日19時38分に北西の空に火球があつた由川人氏から報告があつた。岡山縣南部、廣島縣東部でカンガム彗星観測中見られた方があると思ふ。實見者の報告を期待する。

x x x x x

前號に引つゞき、今回は昨年七月—九月までの観測概略を報告する、前回に洩れたものを若干追加した。

観測者	(略符)	観測地
江川義	Eg	千葉縣柏町
小槇孝二郎	Ko	和歌山縣金屋
川人武正	Kw	香川縣觀音寺町
谷口裕康	Tg	神戸市
富田弘一郎	Tm	東京市
吉井耕一	Ys	廣島縣竹原

(觀測の概略) Daily Summary of Meteoric Observation, June—Sept., 1940.

Date	Obs.	Begins	Ends	Dur.	Factor	Meteors	Remarks
月 日	觀測者	觀測開始	觀測終了	時間數		流星數	備 考
		^h ^m	^h ^m	^m			
June 23	Eg	21 15	22 15	60	0.8	2	
六 25	"	20 27	20 57	30	0.9	1	
月 13	Ys	0 14	1 14	60		6	
14	"	0 50	2 20	90	0.7	11+*1	
July 5	Eg	21 50	22 50	60	0.9	6	
5	Ys	21 0	22 5	65		7	
29—	Ko	23 5	0 25	80	0.9	14+*8	δA11
30—	"	23 18	0 48	90	0.8	24+*9	δA15, P2
1	Kw	21 0	22 0	60	0.5	3	
2	"	21 0	22 0	"	0.6	2	
3	"	21 0	22 0	"	0.7	4	
4	"	21 0	22 0	"	0.8	4	
5	"	21 0	22 0	"	0.5	2	
6	"	21 0	22 0	"	1.0	4	
19	"	21 0	22 0	"	0.3	0	
20	"	21 0	22 0	"	0.4	3	
22	"	21 0	22 0	"	0.5	0	
29	"	21 0	22 0	"	1.0	8	P1
30	"	21 0	22 0	"		6	
26—	Tg	22 0	24 0	120		4	
Aug. 2	Eg	20 37	21 45	60	0.85	13	(1)
5	"	20 30	21 30	60	0.9	10	
六 6	"	0 16	3 0	164	1.0	72+*20	P25?
9	"	0 2	1 47	105	0.8	41+*11	P16?
15	"	1 40	2 10	30	0.7	8+*1	P 5?
5	Ko	20 35	20 55	20	0.7	1+*3	
6	"	22 0	23 0	60	1.0	12+*1	P 3
13	"	0 40	2 30	110	0.8	32+*19	P22+*13
14	"	3 0	4 0	60	0.7	17+*6	P14+*3
4	Ys	23 25	24 0	35		5+*1	
13	"	1 50	3 30	100	0.6	21+*10	P 8
26	"	21 0	22 15	75		8	
27	"	20 59	22 59	120		18+*6	
7	Kw	0 0	3 0	100	0.6	6	(2) P1
6	"	2 0	3 0	60	0.7	7	P 5
11	"	2 0	2 50	50	0.3	3	P 2
13	"	2 0	3 30	90	0.8	11	P 9
4	Tg	1 50	4 5	135		4	δA1, P1?
6	Tm	0 0	2 0	120		38	P16?
Sept. 25	Eg	21 50	22 15	25	0.9	3	

備考 *印は數へたるのみの流星 Only Counted

δA: 水瓶座 δ 流星群 δ-Aquarids

P: ペルセウス流星群 Perseids

(1) 8 分間休止 8^mStopped(2) 80 分間休止 80^mStopped

以上の外火球 2 個の報告あり。

★ 黃道光課より

静岡縣の醍醐氏より去る十一月21日(帶, 照), 同22日(帶, 照), 同26日(帶, 照), 同27日(東光, 帶, 照), 同30日(帶, 照), 十二月1日(東光, 西光, 帶, 照), 同2日(東光, 西光, 帶, 照), 同4日(東光), 同8日(東光), 同9日(東光), 同20日(西光, 帶), 同21日(西光, 帶), 同22日(西光, 帶), 及び月の散光現象(4回)の觀測報告を受理した。東京市の富田氏から去十二月27日(西光)と同29日(西光)との報告を受理した。静岡縣の大石氏から去十二月5日(東光), 同18日(西光), 同20日(西光), 同21日(西光), 同22日(西光), 同25日(西光), 同27日(西光), 同29日(東光)の觀測報告を受理した。又イタリア國ボロニヤ市の E. Loreta 氏から久しぶりに來信あり, 1939年九月12日(東光), 同21日(東光), 同十月21日(東光), 同24日(東光), 同十一月6日(照), 同18日(東光), 同十二月8日(東光), 1940年一月29日(西光), 同十一月9日(東光)の觀測結果を報告して來た。特に日伊同盟のよしみを以つて, 協同觀測を熱心に申込んで來てゐられるのは愉快である。今からでは, 今春の間に合はないが, 次の秋期までにはプログラムを建てたいと思ふ。

筆者は年末以來, 滋賀縣の新設田上天文臺で, やはり, 黃道光の觀測をやつてゐるが, 特に去る十二月29日の夕刻の西天に見えた二等邊三角形の黃道光は立派なものであつた。

醍醐氏が, 御家の都合により伊豆東岸の居所を去られたのは惜しいことである。暫くは横濱に居られるが, 將來は又, 好い觀測地に移られんことを望んでやまない。(山本)

15年十二月初旬の觀測狀況を申し上げますと, 天氣は割合ひ恵まれまして, 光帶なども, かなり確度良いものを得ることが出来ました。又西天の黃道光が光を増すと共に曉東天の同光が光も弱まり形狀も細くなりました。對日照は現在非常に困難でございます。プレヤデス, ヒヤデスは遊星より強敵です。此の兩群から出ます廣い散光と銀河附近微光星等の爲その形狀も正確に認めることは出来ません。對日照自身の光も弱いのではないかと思います。それがそれも正確に判りません。

十二月6日

醍 醐 正

山本先生 硯北

★ 太 陽 課 (1940年十二月)

報告者17名, 新たに下記の三君を迎へた。

蔡 章 猷	臺北市入船町	55 ^{mm}	屈折	×64	投影
古 屋 四 郎	甲府市百石町	32	〃	×44	直視
保 積 善 太 郎	東京市深川區	75	反射	×44	〃

太陽黑點相對數報告 (1940年12月)

觀測者 (觀測地)	蔡章獻 (臺北市八船町)	坂上務 (鹿兒島市山下町)	津留繁雄 (熊本市本莊町)	廣瀬辨三 (廣島市皆實町)	本田實 (瀬戸觀測所)	竹内潤 (大阪市天王寺區)	木村直樹 (和歌山縣衛生課)	正村一忠 (岐阜市天王寺山)	金田伊三吉 (石川縣寶立町)	大石辰次 (靜岡縣吉永村)	沓掛七二 (長野縣青木村)	古屋四郎 (甲府市百石町)	堀田泰生 (橫濱市鶴見區)	森久保茂 (東京慈惠醫大)	阿部正明 (東京市池袋)	保積善太郎 (東京市深川)	江川義 (千葉縣柏町)
口徑 mm	55	42	130	58	75	32	12.5	90	30	55	102	32	20	50	28	75	30
倍率	64	64	48	50	60	50	80		53	64	75	44	50	50	45	44	50
方法	投	投	投	直	直	直	直	投	直投	直	直	直	直投	直投	投	直	直
1	37	39			27			缺	12	30	壘		42	32	25	57	27
2	30				25		36	壘	11	11	壘	〃		11	22	26	24
3	30		34		壘			35	11	34	壘	〃	42		22	18	24
4	55				〃		36	壘	47	壘	56	〃			46	壘	61
5	71				57			73	57	69	壘		90		48	61	43
6	雨				壘			78	75	壘	75				壘	77	
7	壘	80			76			雨	70	〃	〃	54			〃	雨	
8	〃	93		41	壘	77	62	87	71	83	〃	58	91		〃	92	70
9	109			40	84		102	80	96	76	86	59	120		84	119	83
10	缺			105	96		壘	缺	雨	101	155	61			124	134	
11	雨			117	壘		113	壘	147	155	壘	94			166	205	134
12	145	156		90	124		107	151	140	138	〃	84			139	177	
13	160			94	139		101	壘	〃	雪	107	〃		111		139	109
14	188			99	壘		100	〃	雨	139	〃	86		131		113	120
15	181	132		76	〃	86	86	缺	95	121	〃	70				124	100
16	壘			74	〃	93		壘	63	109	130	55	128			95	
17	91			35	〃			雨	36	壘	壘	壘				雨	
18	74			27	64	56		72	36	69	77	32	86		77	68	
19	74	64	66	16	38	57		雨	35	60	雪	28	76			45	
20	缺		62	22	壘	58		53	38	50	缺	41	53			37	
21	51		39	19	36			38	24	34	47	26		39		27	37
22	52			35	39			46	27	40	壘	20		54		30	
23	56			22	壘			雨	雨	壘	〃	雨				雨	
24	雨			〃	〃			壘	〃	〃	〃	33				〃	
25	〃	68		23	45		43	缺	45	48	66	44				50	50
26	64				50		40	〃	40	42	壘	44				56	45
27	雨				42		忙	40	43	40	43	42	51			45	41
28	壘	44			壘		28	40	33	25	60	32		29		30	38
29	雨	40	40		〃		27	37	39	35	41	40	45			25	41
30	壘	62			〃		壘	壘	35	壘	69	68				41	
31	64	59	58		47		26	61	壘	59	51	48		47		33	26
日數	18	11	6	22	16	6	14	14	24	23	13	23	12	7	11	26	17
平均	84	76	50	44		71	65	64	54	71	74	52	73	58	73	75	60
前月平均		72	56	41	55	42	49		46	56	78				52		47

訂正 天界236號(10月分)坂上氏27日を95, 31日を63, (11月分)28日缺, 29, 30日分を, 28, 29日觀測の分と訂正します。

待望の臺灣に熱心な觀測者を得たことをうれしく思ふ。この上は朝鮮、滿洲に有力な觀測者を得て、觀測網の完璧を期したい尙ほ、此の頃、毎月の報告が幹事の手許に届くのが非常におくれる人が多いのは遺憾に堪えない。此の種の報告は、“届きさへすれば、何時でも宜い。おくれたつて宜いのだ”といふものでは決してない。遅れれば、其れだけ學値が低下するのであることを御記憶願ひたい。(本田) ●昨年末以來、本田氏の觀測結果は、精密なスケッチと共に、毎日々々編輯局へ送られて、太陽面の活動する現況を速報されつゝある。之れは大きい貢獻といひたい。(山本)

★ 彗星課より

一月下旬の初頭に當り、アメリカからと、瀬戸からと、二つ、彗星電報が入つた。アメリカのは、加州 Escondido 村の Clarence L. Friend 氏が發見したもののだが、其の發見日時は不明である。電報はコペンハーゲンの中央局からで、獨國ハムブルグ(ベルゲドルフ)天文臺で觀測した結果、即ち、一月18日20時、赤經 $22^h 21^m.2$ 、赤緯 $+43^\circ 40'$ 、光度10級とある。又、瀬戸のは我が本田實君が21日11時半(U. T.)に發見したもので、黃道光觀測所長の計算によれば、赤經 $22^h 28^m 46^s$ 、赤緯 $+44^\circ 56'$ (分點1941.0)、光度8級とある、——どうも、きわどい發見競争であるが、之れは同じ星らしい。本田君が發見した時には、既にコペンハーゲン電報が日本に來てゐた時であるから、正式に獨立發見を認めてくれるか、どうか、疑はしいけれど、吾々としては本田君の獨立發見を、なにも外國に遠慮して、認めないといふ必要はないので、堂々と“フレンド本田彗星”と呼ぶこととする。萬事は急報で御覽下さい。●一月28日、又々コペンハーゲン電報が來た。1941b星を南阿ブルームフォンタイン市ハート天文臺出張所長 Paraskevopoulos 博士が發見したニュースである。位置は、南米コルドバ天文臺 Bobone 氏等が觀測したもので、一月24日の位置は、赤經 $17^h 13^m$ 赤緯 $-49^\circ 27'$ であるから、日本内地からは殆んど見えないやうな低い南天である。光度が2等級と報ぜられてゐるから、可なりスバラシイものであるが、今暫く待つて見なければ、軌道も何も豫想が付かない。此の星は毎日5°程も運動し、一月下旬に南極圈を横斷して、二月初めには北上し、祭壇座から鯨座に姿を現はす筈である。急報によつて詳細を知つて頂きたい。尙ほ、觀測部としては、出来るだけ日刊の諸新聞をも利用する筈である。

觀測部長より

活潑なる學術研究を促進するため、今後、我が觀測部員各位の奮勵を望むと共に、この月報欄を著しく國際化する。従つて諸報告は(流星課や、變星課の如く)和文と歐文(當分は英文にて)とを並記することとする。(木邊)